

# 劇を見る子どもたち

— 子どもたちは変わったか —

小林 美実

三十年前、私は同じ短大に勤める児童文化担当教員や保育者たちと人形劇団を結成した。子どもが好きで人形劇が好きなの集まりだった。当時は子どもの数も多く、保育現場にも活気があった。毎週土曜日の夜集まり、人形を作り練習する。休日には荷物をかついで公演に出かける。そうして三十年がたった。

今、人形劇団は「劇団」になった。人形劇は幼

児のための大事な演目として必ず演じているが、それに「劇あそび」に近い「参加劇」や「リーダー・シアター」等が加わり、一層保育者集団らしい特色ある劇団になった。公演にも、メンバーの車、遠距離の場合は宅配便やレンタカー等機動力を駆使する様になり、公演場所も立派になった。音響設備が整い、暖房は勿論、冷房も入る。快適な所で公演することが多くなった。物的

に豊かに、便利に楽になり、かわりに私たちの体力が落ちた様に思う。

ところでよく質問される。「劇を見るに集まる子どもたちも、ずい分変わったでしょうね」。私たちの公演場所は、学校や幼稚園・保育園以外が多い。児童館、児童センター、社会教育や福祉などの施設、集会場などである。皆さん、学校や園の外、つまり「先生」のいない所での子どもの様子に興味があるのだろうか。

しかし今の子どもたちは、放課後や降園後でも自由に遊びまわれない。自由にかけまわれる広い空間も無いし、年齢を越えて遊ぶ「あそび集団」も街中から消えた。周りの大人が子どもものやることを決めている。親の都合や考えが優先している。劇を見に来るのも親が決めること。特に幼児は大人がつきそって来るから当然だろうが、小学生も親の指示に従っている。会場には「先生」は



▲人形劇を見る子どもたち（昭和61年 静岡県 児童館）

いないけれど、大人たちの囲いの中に子どもたちはいるのだ。最近の子どもをねらう犯罪の増加は、この様な囲いを一層強いものにしてしまった。大人の囲いは、良くも悪しくも必要な時代なのだ。

会場に来る子どもたちはどう変わったのだろうか。子どもだけが変わったのだろうか。

### 生まれてはじめて人形劇を見る子ども

母親に連れられて、一歳前後の小さい子どもたちが会場にやって来る。親の膝の上に座って少し不安気になっている。親にしがみついている子もいる。この場所も、これから目にすることも、子どもたちにとってすべてが初めてなのだ。劇が始まり、人形がけこみの上に出る。それをおどろいた様な表情で、じっと見つめる。その人形が動き出し、しゃべり出すと、それだけでびっくりして泣

き出す子もいる。可愛い狼や鬼が出ようものなら、何人もがつかれて泣いてしまう。大人たちはそれを面白がつて笑うけれど、子どもにとっては大変な出来事なのだ。それもおさまって、またじっと人形に見入っている。楽しい音楽がきこえてくると、体をびよんびよん動かしたりする。劇が終ると、フーッとため息をついたり、急に周りを見まわしたり、親に強く抱きついたり。目の前で動きしゃべる人形との出会いによって、まだストリーもののわからない小さい子どもの体の奥に、何か不思議なことが起きた様に感じる。ごく幼い子どもの、初めて人形劇を見る様子は、今も変わっていない。

### 劇を見る子どもたちは、変わったか

約三十年前、すでに「子ども劇場」が全国に活動を広げていた。青山の「子どもの城」をはじ



▲参加劇「魔法の笛」でいっしょに演じる子どもたち（平成7年 茨城県 児童館）

め、子どものための文化施設が各地に建設され始めていた。しかし公演して歩いてみると、東京都内でも、生の劇をあまり見る機会の無い子どもが沢山いた。但し、テレビは皆が見ていた。ドリフターズは大人気だし、今も人気の「ドラえもん」も始まった。

その頃の子どもたちは、あそび仲間や兄弟姉妹で群れてドヤドヤやって来た。興奮ぎみで、静かに座っていない。子ども席は原則として舞台のすぐ前の床の上だ。その広い場所が嬉しくて、さっそくねころがる、ふざけあう、走りまわる。何にでも興味があつて、幕や照明器具をさわりにくる。時には喧嘩も始まる。幼児も小学生の後について、まねて走りまわる。とてもじっとしてられないのだ。しかし劇が始まると、不思議におちついて見入ってくるのがわかる。表情も豊かに、まじめな顔や笑う顔、その反応のよさに、演じる

方も力が入る。しかし面白くない、飽きた、となると大変。しゃべり出し動き出す。テレビの流行のせりふや動作をまねてふざける。面白そう、と感じると、また真剣に見始める。劇を見終ると、また友だちと群れて元気に帰っていく。次のあそび場所に行くのだろう。

今、子どもたちはおとなしい。劇を見る機会が増えて、この様な場所に慣れた、ということではないと思う。あそび仲間と大勢連れだつて来ることは少ない。一見、行儀良く見える。参加劇で一緒に劇をして楽しそうであっても、その表し方が弱く、ぼんやり、うじうじと表す。自分の気持ちや思いを表すことに自信が無いように見える。中には元気にとび出して劇に参加し、「ヤッター!」と強い喜びの気持ちをつばいの笑顔や動作に表して席に戻る子どももいるが、少数派だ。この連中が一番劇をくい入る様に見ていることが面白



▲参加劇「ジャングル族の村祭」 つくった槍を村人にプレゼントする子どもたち（平成8年 沖縄県）

い。今でもこの様な子どもにはあそび友だちが何人もいる。一緒に隣りあって座り、舞台上の出来ごとに互いに腕をくっつけあったり、ことばを交わしたり、笑いあったり、じっと動かずに見入ったりしている。但し以前とちがいで、同年齢の子どもだけで仲間になっているのが寂しい。

小学生は「先生」がいないことの解放感を最も表す子どもたちである。児童館の指導員や地域子ども会の世話役の中には、先生より先生らしい、管理に励む人もいるが、多くは子どもと共に楽しむとする気持ちが強い。そうした人たちのいる所では、子どもたちはのびのびしていて、雰囲気には活気がある。充分仲間と遊んでいる子どもたちは、劇の見方も良い。管理され指示されてすごしている子どもたちは、その欲求不満をぶつけるように、いやな見方をする。劇のあら探しのような見方をしてヤジったり、ことばをかけても素直に

応えない。小学校の五、六年生や中学生の中には、終始冷やかな目で見ている子どももいる。めったにないことだが、後味の悪い公演になってしまう。劇は、演じる者と観る者とでつくりあげるもの。両者が表現しあうことで、つながりが生れ、劇が一層より上っていく。また劇に流行のキャラクターやギャグは不要である。その様な劇と無関係の瞬間の刺激に、子どもたちはごまかされない。大きなホールより、子どもの身の丈にあった程よい空間の中で、暖かく豊かな劇的表現を両者が楽しむ。表すことに臆病になっている子どもたちが、次第に劇に引き込まれて、豊かな表情になっていくのが楽しみだ。

### 子どもより変わった大人たち

周囲の大人が変わった、と感じることが多い。子どもをあやせない母親、子どもとことばを交さ



▲人形と踊る小さい子どもたち（平成16年5月 立川市市民祭り）

ない母親が目につく様になった。面倒くさそうに、子どものことばに返事を返さず無視する。子どもが問いかけても顔も見ずに生返事する。また、自分が劇に見入ってしまい、子どもが泣いてもぐずっても、そのまま見続けている。劇を楽しむ子どもの様子を見守る、大人らしい親の態度ではない。また、劇が終るとテレビのチャンネルを切りかえたりスイッチを切るようにすぐ立って、子どもの手をひっぱってさっさと帰るか、他の母親としゃべり出す。子どもは舞台をふりかえり見ている。子どもの体の中にある、ワクワクドキドキしたあとの残り火の様なもの、つまり楽しさや快さやおどろきの余韻に全く気づいていない。子どもにとってそれを母親に伝えることは難しい。母親には子どもの心を察する姿勢がない。こうして子どもは次第に表すことを止め、表情を堅くするのだろうか。

最近は父親の観客も多くなり、お父さんの方が楽しそうに子どもと話したりしている。また、お年寄も結構見に来てくれる。地域の子どもの会では、赤ちゃんからお年寄まで幅広い年齢の人々が一緒に座り劇を楽しんでいる。この事だけでも、地域に開かれた催しは素晴らしいと思う。

### ある児童館でのすばらしい体験

一昨年夏、山梨の南アルプスに近い町の児童館で公演した時のことである。冷房の無い建物で、当日は三十七度の猛暑だった。朝私たちが到着した時、すでに小学生たちが今日の催しの準備をしていた。受けつけ、あいさつ、途中の歌や手あそびを自分たちが率先して受けもつという。劇の中の唯一の舞台装置のトーンボール作りも、全く大人の指示を求めず、積極的だ。劇が始まると、館長さんたちも一緒に床に座り、共に歌い、笑

い、劇に参加し、大いに楽しんでいた。このような機会は大変少ないとのことだったが、子どもたちの見方はすばらしかった。心も体も柔軟に育っている。劇や物語の語るものを、素直にきちつと受けとめて、反応を返してくる。参加劇の「ジャングル族の村祭」では、全員が汗びつしよりになって、酋長へのプレゼントの槍を新聞紙で作り、踊り、リズムをとり、祭りに参加した。何がこの子どもたちを元気にしているのだろう。周囲の豊かな自然環境は勿論大事だろうが、なによりここに集まってくる大人たち（地域の赤ん坊から年寄まで、皆にこにこ笑顔でやって来た。深いきずなができていることが感じられた）の子どもを見守る暖かくゆるやかな大きな輪、それは一つの囲いともいえるが、その力ではないか、と思う。気持ちのよい公演、そして人々との出会いだった。

（宝仙学園短期大学名誉教授）